

一般部門



市長賞

「のびのびえん」 高橋 暁子さん

講 評

子どもたちの笑顔が素晴らしい。一人一人思い思いの表情だ。笑顔の子たちが厚木の未来を背負ってくれることを確信できる。全員を均等に写し出したアングルが良い。このような位置から撮影できることで、撮影者と子どもたちとの日頃からの温かい信頼関係が伝わってくる。審査員同士で「まさに広報紙の表紙に使いたい写真だ」と話した。

神奈川新聞社賞

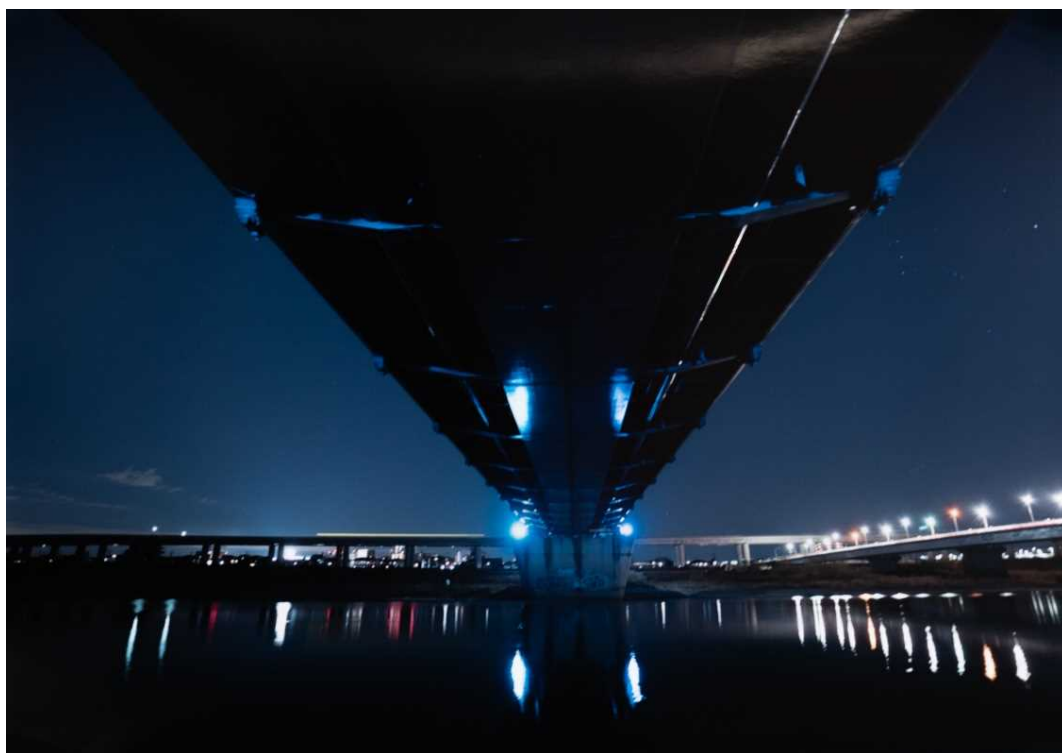
「あきのたのしみかた」

竹下 綾華さん

講 評

黄色く色付く銀杏並木に息子さんでしょうか、上から降り注ぐ銀杏の葉を仰ぎ見ている一瞬を捉えた素晴らしい1枚。一人で歩けるようになったお子さんと散歩にでも出たのでしょうか、季節を感じさせる1枚となりました。

1枚の写真の中にお子さんの成長を願う気持ちと、巡るめく季節の移ろいが表現されています。今後もお子さんの成長と季節を合わせて見守るような写真を撮り続けてください。



観光協会賞

「厚木にスターウォーズ現る」

砂川 勝洋さん

講 評

まさにタイトル通り夕闇の中に突然、スターウォーズに出てきそうな大きな物体が現れ吸い込まれていくように感じる。暗い夜空をバックにさらに暗い橋脚の下から撮る大胆さがすごい。

観る人に想像を膨らませる画像になっている。現実空間なのだが非現実の仮想空間に見えてくる。

今後も自らのアングルを見つめ撮り進めてほしい。



「うれしい春が来た」

山田 フジ子さん

講 評

4月桜の咲く頃は新入生の新しい出発の季節である。保護者や撮影者がいるこちら側に向かって駆け寄る子供たち。満開の桜が祝福している。足元には花びらも散っている。子どもたちの回りは一面の桜まみれだ。

新入生にとって桜が似合うこの時から、1年近く経った。コロナ禍の中だが新しい友だちと一緒に学校生活を楽しんでいて欲しいと願う。



「金色みつけた」

津山 菜摘さん

講 評

子どもたちをモデルにした同一構図の作品が季節ごとに3枚応募された。子どもの成長記録を厚木の四季の中で撮影された。二人が成長した時、素晴らしい思い出の写真となるだろう。

農地と住宅地が共存する厚木市の景色。稲穂がたれる秋のこの作品を選んだ。子どもの成長を記録することは写真の原点。広報写真としては周囲の環境も写し込むことは大切なポイントの一つ。

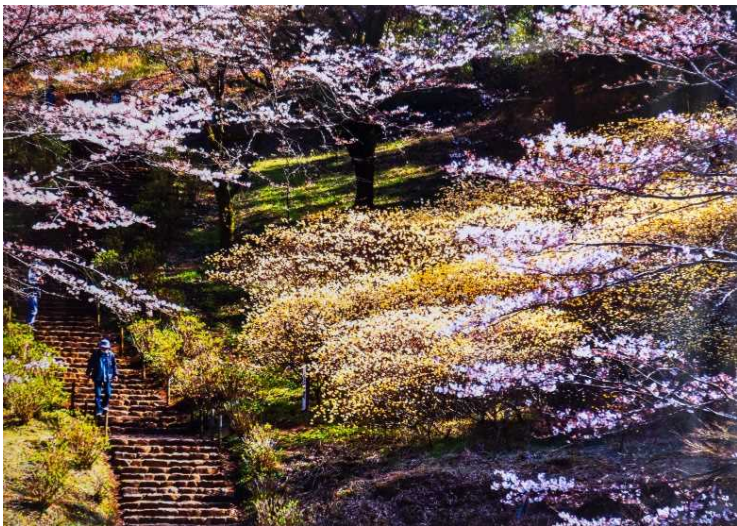


「ドリーム・カム・トゥルー」

内野 秀明さん

講 評

会場の周りの紅白幕、大きな荷物をそばに置いた様子から入学式の一コマだろうか。生徒たちのはにかみと笑顔から式典が始まる前だろうか。和やかで安心した雰囲気が感じられるので撮影者は同じ高校生の友人かと思ったが、撮影者の温かい自然な振る舞いが彼女たちの笑顔を引き出したと思う。写される側に寄り添う撮影姿勢は写真を撮る者の基本中の基本だ。



「桜とミツマタ」

関口 通規さん

講 評

この写真の良さは写された見事な桜とミツマタが咲き誇る構図に尽きる。魅力あふれる場所だと教えてくれる。散策する人を点景として入れたことでバランスが取れ画面が引き締まった。

彩度を上げ過ぎると雰囲気は壊れる。撮ったままの自然な彩度でも十分に見ごたえある景色になっていたと思う。



「夏空」

金澤 遼平さん

講 評

大胆な構図、ビルから噴き出ているような雲の形が良い。自転車を止め前方を見つめる後ろ姿から撮ったことで希望に向かっていく感じになった。カメラポジションを変えて何かカットかを撮られ、このカットを選ばれたのだと思う。雲の位置を画面のどの場所にするかは今後の課題として欲しい。

突然現れた面白い形の雲に反応し近くにいる人物を配してレンズを向けたことを評価したい。



「街にも秋がやってきた」

町野 正樹さん

講 評

イベントの自粛のため行事や市街地で撮影された作品が少なかった。街の中心部にある厚木中央公園は市民の憩いの場だ。秋の夕暮れ時、二組の家族連れと自転車の子供を追う女性。楽しかったことを話している母娘たち。

市内には家族で楽しめる緑あふれる公園が多い。市街地の公園の木々も季節により趣を見せてくれる。夕陽が秋らしさを強く印象付けた。



「葉っぱとダンス」

今村 弥生さん

講 評

子どもたちは何でも遊び道具にしてしまう。落ち葉が光っている。三人三様の動きが連続写真を見ているよう。女の子たちの楽しそうな様子が伝わってくる。

子どもたちは遊ぶ場所を探すのが天才だ。緑の多い厚木市内には自然あふれる憩いの場が各地に点在する。逆光が季節感と子どもたちの動きを輝かせている。そろそろ家に帰る時間かも。



「ガラスの中に咲く菜の花」

遠藤 昌彦さん

講 評

菜の花が咲き誇る花畑。正視の景色と逆さまの景色を同時に見せてくれるアイデアが良い。ガラス玉の中の景色は、菜の花の黄色と澄み切った青空が逆転した不思議な景色だ。見慣れた景色も逆さまに見ると新鮮な景色になる。

フレーミングを工夫してガラス球を大きくすれば、主題がさらに引き立ったと思う。このアイデアを生かし、他の場所でも撮り続けてほしい。



「収穫の時」

土井 文明さん

講 評

秋の収穫の風景を切り取った季節感あふれる1枚。コロナ禍であろうと収穫は待ってはくれません。家族総出でしょうか。顔は見えていませんが、今年も収穫の喜びをかみしめながら働いているのが何となくにじみ出ているような写真となりました。

1年間の苦労がこの一瞬に凝縮されているのが分かる素晴らしい1枚です。

「大動脈」

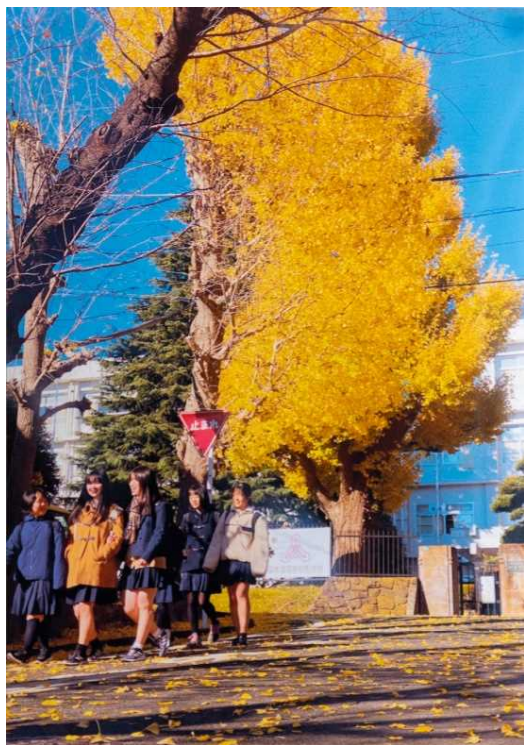
佐伯 四郎さん

講 評

神奈川の大河相模川は厚木市を象徴する場所の一つ。小田急線は、都心につながる大動脈。相模川の鉄橋を渡る電車と堤に咲く赤いバラを一つの画面にまとめて見せてくれた。すっきりした画面に赤い花がさえ、季節感ある爽やかな作品になった。

ロマンスカーが来るのを待つかは悩むところだが、この電車の方が生活感が出た。市内に流れる河川は多い。河川敷や堤は市民の憩いの場になっている。

審査員奨励賞



「帰宅」 小坂 柚葵さん



「愛」 佐伯 誠斗さん

講 評

レンズを向ける時は、何を撮るかをはっきりさせることが大切。はっきりすればどう撮るべきかが分かる。撮るべきものを主役にする。脇役を添えることは必要だが、不要と思うものはできるだけ入らないようにする。何でも入れてしまうと主役が曖昧になる。高校生活は人生の中でも最も思い出の残る時期でもある。仲の良い友人同士なら気楽にレンズを向けられる。ぜひ友人同士で部活や放課後に撮り合って欲しい。カメラでなくてもスマホなら撮りやすい。思い出の写真をたくさん撮って欲しい。上手に撮ろうとせず、まずは記録するつもりで。

私の高校時代は、クラス仲間や学校行事には積極的に写真を撮った。撮った写真は今も同窓会などで上映し同級生仲間で当時を懐かしんでいる。撮っていたことが記録と記憶になった。